

中枢神経系自己免疫性疾患における疲労の評価

研究分担者： 磯部紀子 九州大学大学院医学研究院神経内科学

研究協力者： 田中栄蔵、渡邊 充（九州大学大学院医学研究院神経内科学）
新野正明（北海道医療センター臨床研究部）

研究要旨

筋痛性脳脊髄炎／慢性疲労症候群（ME/CFS）は、感染症様症状等を契機とし、強い倦怠感に加え多様な神経機能異常や労作後の消耗を特徴とする疾患であるが、その疲労について他の疾患との異同は十分になっていない。今回、他の疲労を来す中枢神経系自己免疫性疾患である多発性硬化症を対象に疲労の特徴を明らかにした。今後、ME/CFSとの鑑別に資することが期待される。

A. 研究目的

筋痛性脳脊髄炎／慢性疲労症候群（ME/CFS）は、感染症様症状等を契機とし、強い倦怠感に加え多様な神経機能異常や労作後の消耗を特徴とする疾患であるが、その疲労について他の疾患との異同は十分になっていない。今回、他の疲労を来す中枢神経系自己免疫性疾患である多発性硬化症（MS）を対象に疲労の特徴を明らかにし、今後、ME/CFSとの鑑別に役立つ点を考察する。

B. 研究方法

九州大学病院脳神経内科に通院歴のあるMS患者のうち、高次脳機能の評価と共に疲労についての質問票であるFatigue Severity Scale（FSS）に回答した61名を対象とした。対象者は1年に1回、3年にわたり、FSSの他、臨床的重症度スコアであるExpanded Disability Status Scale（EDSS）も合わせて解析に用いた。

（倫理面への配慮）

九州大学医系地区部局臨床研究倫理審査委員会において許可を受けた。

C. 研究結果

対象のうち、女性は47名（77.0%）を占め、初回調査を行った、罹病期間の中央値10.5年（第1－第3四分位：5－18.5）年時点で、再発寛解型MSが56名（91.8%）、進行型MSが5名であった。発症年齢の中央値は29（22－34）歳で、オリゴクローナルバンド陽性率は64.2%であった。初年度の調査では、EDSSは2（1－2）で、FSSは中央値35.5（24.5－46.5）であった。翌年の調査では、EDSSが2（1－2.38）で、FSSは

38（27－47）、翌々年では、EDSS 1.5（0－2）でFSSは38（27.5－49）であった。

D. 考察

MSではFSSの中央値は2年目から36を越え、罹病期間の経過に伴い、疲労が蓄積する傾向にあった。既報ではME/CFS21例のFSSは平均59.94と高値であり（Krumina A, et al. Br J Med Med Res 2014）、疲労が高頻度に認められるMSよりさらに顕著な疲労を有する状況が改めて確認された。

E. 結論

中枢神経系自己免疫性疾患であるMSを対象とし疲労の状況について明らかにした。今後、日本におけるME/CFSの疲労の実際との比較対象として参考になりうると思われる。

F. 健康危険情報 なし

G. 研究発表

1. 論文発表 なし
2. 学会発表 なし

H. 知的財産権の出願・登録状況 （予定を含む。）

1. 特許取得 なし
2. 実用新案登録 なし
3. その他 なし